

保育かながわ

発行所
 横浜市神奈川区沢渡4の2
 一般社団法人
 神奈川県保育会
 発行人
 萩原敬三
 題字
 故内山岩太郎筆

第35回 保育の日前夜祭

平成二十四年十一月三十日、横浜ベイシエラトンホテルにおいて、第三十五回「保育の日前夜祭」が開催されました。当日は、長年にわたり子ども達の育成に多大の貢献をなされ、本年度の栄を受けられた受賞者の皆さまをお招きし、県行政、保育関係者が一堂に会して、お祝いをしました。

また、日頃より保育に携わる皆様の労をねぎらい、今後も保育事業のより一層の進展に資することを確認し合いました。

全国で唯一の「保育賞」は神奈川県独自の褒章制度で、今年度で四十八回目の表彰になります。

宮田副理事長の「開会のごとば」に続き、萩原理事長より受賞者にお祝いの言葉が述べられました。

保育会ではすっきりおなじ

みになったマスコットキャラクター「かなわん」と共にステージに上られた次の七名の方々に萩原理事長より花束が贈呈されました。



神奈川県保育賞

海老名市(下今泉保育園)

貝塚容子様

三浦市(上宮田小羊保育園)

工藤美保様

横須賀市(長井婦人会保育園)

根岸由美子様

褒章

茅ヶ崎市(松林保育園) 小川晃様
 三浦市(三崎二葉保育園) 生野隆彦様
 逗子市(双葉保育園) 小池カズエ様
 厚生労働大臣表彰 平塚市(須賀保育園) 鈴木明恵様

以上の皆様方受賞おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

受賞者の方々からは、保育士という仕事に対しての愛情溢れるごあいさつをいただきました。

ご臨席いただいた保育関係者の方々からも心温まるお祝いの言葉や励ましの言葉をいただきました。その一つひとつの言葉は重みを感じ、心に響くものでした。

式典後に行なわれたアトラ

クションでは、女性六人の演奏グループ「厚木チェリーズ」によるハーモニカアンサンブル、ミニコンサートの世界を堪能することができました。

子育てをしながら演奏活動を続けている「厚木チェリーズ」は5年連続で全国ハーモニカコンテスト(アンサンブル部門)優勝の偉業を果たしているママさんグループです。

音色の違う色々な種類のハーモニカが奏でるすばらしい演奏にいつしか手拍子で会場が一つとなり、楽しいひと時を過ごすことができました。

懇親会は富田相談役の乾杯のご発声で和やかに始まりました。

「皆さんは若い人達の先頭に立って、子どもと同じように教育して行ってほしい」との力強いお言葉をいただき、心に深く刻まれました。

和やかで、暖かい雰囲気の中で参加者相互の親交を深めあうこともでき、終焉を迎えるのが惜しまれる中、都築顧問のお言葉をもって、閉会となりました。

第53回 関東プロシク 保育研究大会

くすへてのなか子どもと子育てを
関わりを持つ社会の実現をめざして

平成二十四年七月五日、六

日。栃木県日光市鬼怒川温泉に於いて第五十三回関東プロシク保育研究大会が開催されました。東京の御座敷と呼ばれる鬼怒川の緑深い溪谷は、千余名の保育関係者を大自然の懐深く迎え入れてくれたようでした。

恒例のオープニングアトラクションは、栃木県出身のアーティストを中心としたジャズ演奏。エレクトーン、フルート、パーカッションが心地の良いアンサンブルを奏でました。アンコールの「リペルタンゴ」はとても3人での演奏とは思えない迫力で開会を盛り上げていました。大程良い緊張感の中、改めて式典の幕が上がりました。大

会運営委員長、栃木県知事等

主催者の挨拶に続いて、来賓、栃木県議会議長、全社協会長の挨拶があり、それぞれに、

3党合意後の修正案を受け、制度と実践を結びつけるための体制作りの重要性、そのための財源の確保、そして風評被害が深刻であることなどを取り上げて話されました。

また、前神奈川県保育会理事長の都筑融光先生に長年の功績を称えて感謝状が贈呈されました。

式典の終わりに読み上げられた大会宣言文は、改めて本大会の開催趣旨を確認し、認可保育所の現状を共に考える内容となっており、満場一致で採択されました。

続いて、白梅学園大学名誉

教授民秋言先生の基調講演が行われ、「今、保育に求められるもの」をテーマに、保育所保育要録の話をして下さいました。保育要録は保育を端的に典型的にまとめたものであり、卒園してからの子どもへの育ちを支えるためのものである。

保育指針が告示化され、保育要録の小学校への提出が義務付けられたのは「育ちの連続性」という視点に立ち、養護と教育が一体となった保育によって、義務教育以降の力の基礎を培うことが、保育所の社会的な責務として求められているからである。保育要録はまだその役割を十分果たせていない。告示化によって簡潔に書かれた保育指針の一言一句を丁寧に、具体的に読み取り、その上で子ども一人ひとりの発達を確かな視点で捉え、小学校との連携を見通していく事が保育所保育にとってのチャンスでもある。と話されました。

抽象的な言葉を分かったような気になって流してしまわず、その言葉の意味を深く考



える事で、本質に近づける事が再確認でき、要録については検討を重ねていく必要性を改めて感じました。

記念講演は「14ひきのシリーズ」が30周年を迎えられる栃木県在住の絵本作家、いわむらかずお先生を迎えて行われました。

戦時中に幼児期を過ごしたいわむら先生は、家族がバラバラに暮らす体験、ひもじい思いをした体験から、家族がそろって食事をする喜びを大切に、絵本の中にこだわりを持って描いているそうです。

また、東日本大震災を機に、便利さの追求ばかりではない暮らしの楽しさを考えるようになったと話されました。

自然の中に身を置いている

と、小動物と戯れているような感覚になったり、昇る朝日、沈む夕日に包まれ、自分が大宇宙に存在している事を実感したりする。そうした実体験から、細部にこだわって描くことで、物語にはリアリティが生まれる。先生のお話を伺っているうちに14匹シリーズの絵本の場面がリンクして、雑木林が広がっていくような気持ちになりました。

「かんがえるカエルくん」の読み聞かせでは、いわむら先生の温かな声と共に、子どもたちの頭の中の宇宙をユーモラスに伝えて下さいました。絵本の持つ力と、いわむら先生のお人柄に触れ、先生が主催されている絵本の丘美術館をぜひ訪ねてみたいとなりました。講演後に行われたサイン会には多くの人が列を作り、講演の余韻を楽しんでいました。

二日目は、全4会場、九つの分科会が開催されました。神奈川県代表として、伊勢原地区、横須賀地区が発表、五

反田保育園の伊澤昭治先生が議長の大役を見事に果たされました。

伊勢原地区は第六分科会「子育てネットワークと保育所の役割」をテーマに、いせはらっ子応援プランを中心にした実践からの研究を発表されました。横須賀地区は第七分科会「コミュニティの再生・子育て文化の創造にむけて」をテーマに、アンケート結果を踏まえて年中行事に注目し、地域を巻き込んだ行事の取り組みについて発表されました。

どちらのテーマも、地域との連携、協働を必要とする、保育所の役割について考えるテーマであり地域の特性が大きく表れていました。民秋先生の言葉にあったように子育て、子育て支援、コミュニティ、子育て文化等の一つ一つの言葉の意味を多方面から丁寧に捉えそれぞれの切り口で、地域性を生かしたネットワーキング作りが展開されているのを感じました。今回の発表を参考にし、更に積極的な発信

が各地に広がっていく事と期待が膨らみます。

伊勢原地区は沖縄県で開催される全国保育研究大会に於いても発表する事が決定しました。



震災後、何気ない日常が当たり前ではない事を知らされた私たちは、鬼怒川の豊かな自然の中に保育関係者が集い、研究会が行われた意義を問い、目の前の子供たちと共に、日本の子供たちの幸せのために、強く手を取り合っていきたい

と改めて心に刻み、それぞれの会場を後にしたのではないでしょうか。

次回開催地からは、ご当地キャラクターのぐんまちゃんに愛きようたつぷりに群馬の魅力を伝え、来年の再会を呼び掛けました。

参加者より

第1回分科会は、「保育所保育指針に基づく質の高い保育を提供する」とのテーマで、4つの研究発表がなされました。

最初に千葉県成田市宗吾保育園から「楽しい、やってみたいと思える環境づくり」と題して実践例の発表がありました。毎日の子どもの姿から読み取れるものは多く、その一つひとつに敏感に気づく目や感性をもつことが保育者にとって大切である。また、環境を用意することで様々な育ちに繋がっていくことを実感し、環境づくりを心がけたことにより、楽しい、やってみたいという気持ちの子どもたちに生まれ、意欲的な活動に

繋がる事が出来たとの内容でした。

2番目は、東京都三鷹市私立井の頭保育園から「おとな(保育者)と密接な絆をつくるために、育児担当性と流れる日課」と題して、保育士の年齢や経験年数や子育て経験があるかどうかを超えて、子どもが親密に担当に結びつきを感じながら自ら色々なあそびをし、発見して、能動的に育つ姿をみるたび、「育児担当性と流れる日課」の有効性を感じるのと発表をされました。

3番目は、新潟県加茂市宝が丘保育園から「子育てと子育て家庭を支える保育所となるために」と題して、保育に関して全くの素人である園長が、「子どもの目線に立つて、この子らの幸せを考えればよい」と先輩からの言葉が保育の基本となり、自然豊かな環境を自ら開拓し、安全な遊び場所を次々と設け、園児はもちろん保護者の方々も利用され、楽しんでいっているという発表がなされました。

最後に栃木県佐野市掘米保育園から「異年齢で培われるもの、人と関わる力、自己肯定感を持てる子を指して」と題して、異年齢保育のねらいを明確にしたことで、保育園だけでなく、保護者を巻き込みながら進めたことで、子どもをみる視点が固定化せず、多様な働きかけを行い子どもたちの表情の捉え方の変化や思いをしつかり受け取ろうとする職員の姿勢、園全体で子どもの発達を見通しながら連携を図ることの重要性を改めて実感されたとの発表がなされました。

発表終了後、助言者で作新学院大学女子短期大学教授の石原氏より、保育所保育指針は守るべき法令として位置づけが明らかになり期待されている。子どもの成長の知らない部分を解説者として保護者に話すことも大切であり、また、親に寄り添って親の育ちを支えていくことも時代の中で求められているとの助言をいただきました。

第 56 回 全国保育研究大会

すべての人が、子どもと子育てに 関わりを持つ社会の実現をめざして

第五十六回全国保育研究大会が平成二十四年十一月十四日(水)～十六日(金)の三日間、沖縄県宜野湾市・マリナーナの一角を占める沖縄コンベンションセンターを拠点に約千七百名の参加者が集い盛大に開催されました。

十一月も半ばというのに亜熱帯気候の沖縄は連日二十四度と快適な気温で過ごしやすく町の中では半袖姿の方も沢山見られました。

午後十二時過ぎ、オープニング・アトラクションが始まり、沖縄ならではの気候や文化から生まれた伝統舞踊に魅せられ会場からは拍手喝采の熱気に包まれた雰囲気の中、開会式を迎えました。

式典では、開会挨拶、児童憲章朗読、物故者への黙とう、全国保育協議会の小川会長・小林副会長からのご挨拶などがありました。

開催地沖縄県副知事の歓迎の挨拶の中で、沖縄の独特な島言葉文化として大切にしている話がありました。身分や年齢を問わずだれもが口に

する「コンニチハ」に相当する「ハイサイ」(男言葉)「ハイタイ」(女言葉)の挨拶語を教えて頂き、よいお土産となりました。

表彰式では都築融光前理事長に全国保育協議会特別感謝が贈られました。又、全国で二百五十八名の方が会長表彰され神奈川県からは五名の方が受けられその功績が称えられました。

最後に大会宣言が読み上げられ全会一致で採択され式典が終了しました。

行政説明では、厚生労働省雇用均等児童家庭局保育課の橋本泰宏課長より今年八月に参議院社会保障と税の一体改革に関する特別委員会及び参議院本会議で三法案が可決・成立されるまでの様々な議論がなされたこれまでの検討経緯の説明がありました。

また、民主・自由民主・公明の三党合意を踏まえ、幼児期の学校教育・保育、地域の子ども・子育て支援を総合的に推進を図る三法の趣旨や〇認定こども園制度の改善〇認

定こども園、幼稚園、保育所を通じた共通の給付(施設型給付)及び小規模保育等(地域型保育給付)の創設〇地域の子ども・子育て支援の充実など主なポイントの枠組みが整備され法改正の意味を含めての説明がありました。そして、今後「地方版子ども・子育て会議」なるものに参画することが求められる旨のお話で括られました。

基調報告では、全国保育協議会小川益丸会長より「保育をめぐる動向と全国保育協議会の取り組み」について報告がありました。すべての子どもに良質な成育環境を保障するという総合的な子どもの家庭福祉政策の確立とそのため財源投入が国の責任のもとに実現されるよう全保協・全国保育士会は国の政策検討の場に参画して強く意見を述べ続ける。その為には何が何でも国レベルの「子ども・子育て会議」のメンバーに入らなければならぬと言われた小川会長の強い思いを感じ取れました。

初日の閉会後には、全国保育協議会特別感謝表彰を受けた都築前理事長、全国保育協議会会長表彰をうけられた園長先生方のお祝いが翌日の分科会で発表される伊勢原市の先生をはじめ、神奈川県からの参加者の出席のもと開かれました。沖縄料理に舌鼓を打ちながら和やかな時間を過ごすことができました。

翌十五日は、六つの会場で十一の分科会が開催され、第六分科会において、伊勢原市大原保育園の岩本美智子先生、リスブラン保育園の高野栄里子先生が「子育て支援のネットワークと保育所の役割」をテーマに見事に発表の大役を果たされました。

「いせはらっこ応援プラン」を中心に、様々な活動を通して地域との連携を発表し、市民からは見えにくい地域のネットワークを市民に向けて発信している取組みとして助言者の大府立大学関川附芳教授から講評をいただきました。また、三つの発表を通して、参加者からの質問が多数寄せ

られ、活発な意見交換が行われ
れました。

午後は事例検討が行われ、
グループ毎に具体的な支援計
画を立案し発表しました。地
域差や保護者の状況などの情
報交換も熱心に行われ保育所
を利用する家庭の状況の深刻
化、それに対応するためのネ
ットワーク作りへの関心の高
さを感じました。

関川先生からは、厳しい状
況下で生活をしている家庭を
社会福祉施設としての認可保
育所がどう支えていくのか。
社会が求める保育士の役割を
改めて考え、社会資源との連
携を構築するために、日頃か
ら顔と顔を合わせた関わりが
大切であるとお話しいただき
地域が求める保育所の役割や
地域との繋がりを見直すこと
ができ、有意義な分科会とな
りました。

大会最終日の記念講演は、
沖縄県老人クラブ連合会副会
長の呉屋清徳氏に依る「沖縄
の福祉の歩みについて」と題
した講演を頂きました。

四十年前の復帰に至るまで

の二十七年間は、米国の植民
地同様な扱いを受け沖縄の自
治はまったく認められない福
祉とは程遠い生活を強いられ
て来たこと。占領下の福祉が
どれだけ困難なものだったか
を語るのも辛そうな当時の苦
悩を僅かではあります察す
ることが出来ました。最後に
「平和に優る福祉なし」とい
う言葉がずつしりと心に響く
講演でした。



大会 保育研究大会

県市町村児童福祉主管課長との 連絡協議会

今年度の県・市町村児童福
祉主管課長と県保育会委員と
の協議会が、平成二十四年七
月二十五日にホテル・キャメ
ロット・ジャパンで開催され
ました。

この協議会の歴史は古く、
元県保育会会長・故鈴木萬吏
先生の時期に始まり、特色と
しては、県保育会委員の他に
行政側から神奈川県保育担当
課長と県所管の市町村、中核
市の保育担当課長が一堂に会
す、全国でも例のない会です。
当日は、宮田副理事長の開
会挨拶がありました。

今回の連絡協議会は、第一
部の議題を「今後の保育所の
あり方について」と題し行わ
れました。基調講演として、
全国保育協議会小川益丸会長
により「今後の保育所のあり
方と全国保育協議会の対応に
ついて」という演題で行われ
ました。小川会長の講演では
子ども子育て三法の三党合意

に至るまでの経緯をお聞かせ
いただきました。平成十九年
十二月に「子どもと家族を応
援する日本」を重点戦略とし
て、全ての子どもを対象とし
て、就学前後、切れ目ない支
援を行うこととしてスタート
し、平成二十年三月社会保障
審議会少子化対策特別部会、
平成二十二年一月子ども・子
育て新システム検討委員会、
平成二十四年三月子ども・子
育て新システム検討委員会に
より法案提出。その後三党の
修正案合意により平成二十四
年六月に衆議院において可決
されるまでの経緯をお聞かせ
いただきました。次に、子ど
も子育て三法、一、子ども子
育て支援法 二、認定こども
園法 三、改正児童福祉法に
ついての説明と問題点、また、
今後の子ども・子育て会議に
よる検討事項、全国保育協議
会の対応についての話をお聞
かせいただきました。

基調講演後、県・市町村担
当課長との意見交換が行われ
ました。各市町村から最低基
準、特に乳児の保育室の面積
基準の対応についての意見が
出されました。今まで、神奈
川県所管では乳児室面積は一
名あたり二・四七五平方メー
トルを最低基準としていたが、
今後は三・三平方メートルが
最低基準となり、それに対応
する経過措置の問題、各園の
保育室の調査を行っているこ
とが報告されました。また、
県の補助金が減となることへ
の不安が各市町村から寄せら
れた。県からは榊原次世代育
成副課長、末松主事が参加さ
れ、副課長からは、緊急財政
対策本部において各種補助金
の見直し等の検討がなされて
いること、保育園の民間保育
所運営費については今後予算
に取り組んでいくことの説明
をいただきました。

意見交換会後、出席された
県市町村担当課長、県保育会
委員との情報交換会・懇親会
が和やかに行われ閉会となり
ました。

関東ブロック

保育事業連絡協議会

九月六日(休)・九月七日(金)両日に亘り小田急ホテルセンチュリー相模大野を会場として、平成二十四年度関東ブロック保育事業連絡協議会が開催されました。本会からは萩原理事長・伊澤副理事長・岩澤理事・都築理事・富田理事・遠藤保育士会長・松本副会長・高橋副会長が参加いたしました。

政令市となつて初めての開催とあつて、相模原市保育連絡協議会、鈴木源二(会長)の下、運営スタッフの皆さまからは並々ならぬ熱意が伝わってまいりました。

開会式では、関東ブロック保育協議会の飯島会長、相模原市の加山市長、そして相模原市保育連絡協議会の鈴木会長が挨拶されました。中でも加山会長のご挨拶からは、政令市としての相模原市の方角性を明確に感じることが出来ました。神奈川の水源としての緑と水の保全、新交通システム(リニア)駅を中心とした新たな都市計画、そしてその中心には次世代を支える子

どもたちとご家庭を支える保育が如何に重要であるかということ。行政が保育の重要性を理解した上で都市としてのビジョンを構成していることを強く示されました。

開会式後は、保育部会・保育士部会・主管課部会・リーダー育成部会と、職域別会議へと場所を移し、それぞれに課せられた提案協議題についてのディスカッションが行われました。共通の問題と地域独自の問題、様々な協議題への活発な意見交換は全ての会場で見られたようで、懇親会の会場でも各都県市に別れたテーブルを越えて熱い議論が続いていました。「職域別のテーブルにして欲しい」という声が随分聞こえてきましたから、平成三十一年度に神奈川で行われる本連絡協議会では、懇親会をそのような場として提供することも一考の価値はあると思います。

レルギーの知識と対応について」と題した講義に移りました。

講師は、国立病院機構相模原病院・臨床研究センター・アレルギー性疾患研究部長の海老澤元宏先生。小児のアレルギーに関しては最先端かつ最前線にいらつしやる方です。正しい治療とケアによつて僅か数日で皮膚の状態が劇的に改善されたケースを映像と共に紹介して下さいましたが、そのあまりにも劇的な変化に会場からは驚きの声と同時に上がった程でした。数分で発現する口腔粘膜經由の症状と三十分〜二時間程で発現する小腸經由の症状の違いや対応など、保育現場で重要な、そして必要とされているお話を理解しやすい言葉と口調で伝えて下さいました。遠方よりお越しいただく先生方へ、どれだけの価値ある情報を提供できるかが、このような会を開催する上で極めて重要であると再認識する時間となりました。

一般社団法人神奈川県保育会定時総会の開催

○3月定時総会(事業計画・予算総会)

日 時 平成 25 年 3 月 14 日(木) 15 時～

議 題 平成 25 年度一般社団法人神奈川県保育会事業計画及び予算案について 他

○4月定時総会(事業報告・決算総会)

日 時 平成 25 年 4 月 27 日(土) 11 時 10 分～

議 題 平成 24 年度一般社団法人神奈川県保育会事業報告及び決算について 他

会場は両回とも神奈川県社会福祉会館会議室

新任保育士研修会

平成二十四年七月二十六日、神奈川県社会福祉会館において、神奈川県保育会利用者相談室第三者委員、元田園調布学園大学副学長の小林育子氏を講師に迎え、『保育者として成長するために』をテーマに保育経験一年目から三年目までの保育士を対象に、新任保育士研修会が開催されました。午前は、『こどもと向かい合う保育』『午後後は、『保護者支援』の各題目で、それぞれ講演後にグループ討議が行われました。

午前の部は、○保育の仕事
○新任保育者を取り巻く環境
○保護者の「揺らぎ」○「揺らぎ」を解消・克服するためにと、四つの柱で進められました。保育時間が長くなると、第一の家が保育園、第二の家が家庭になってきている。家庭とはありのままの自分でいられる唯一の場であり、子どもたちが保育園に長くいることはありのままに

られる場所が保育園である。

子どもたちにはスキンシップを忘れないでほしい。新任保育士は子どもの心を読み取れるようになってほしい。新任保育士の持ち味を十分に発揮し（一生懸命さ、明るさなど）子どもの発想の中から保育を展開していく。何気ない日常生活の繰り返しの中で確実に子どもは変化していることを見逃さない。（昨日と今日、一週間前と今週、何故変わったのか発達か保育の展開か……）等の中で待機児童対策、規制緩和、保育時間の延長など保育所は益々多忙化し、新人でも、早期から独り立ちを要求される事により、揺らぎを感じる（保育の不安や迷い）。この揺らぎを解消、克服するために自己評価や、仲間のコミユニケーションによる支え合い・同僚間で互いにスーパージョンを話し合う・カンファレンスをする。（討議する課題を明確にして対等に意見交

換できることが重要であり、民主的な職場環境にすることは、園長・主任の仕事である）

午後は、『保護者とう向き合うか』というサブタイトルの下、保育ニーズは誰のニーズかは、真の利用者である子どもを離れたところにあるニーズで、保護者はサービズを受けている。子どもの保育を充実させれば、保護者は保育者を信頼する。子どもが変われば、親も変わる。子どもに接するときと同じように、保護者一人ひとりを暖かく受け入れる。多様な家庭の実態を受け入れながら、私たち保育士は、子どもにとってより居心地のよい環境を目指すこと。また、保護者との関係作りとして、日頃からの声かけを心がけ、傾聴の技術を身につける。助言や指導をしなければならぬと焦らない。子どもの園生活の情報は、個別に伝えると共に時期を見て子ども

の想いを伝える。保護者から

の相談は、状況に応じて上司に報告、指導、助言を受ける。守秘義務の重要性。こどもを持つていないという遠慮や気兼ねは不要であること。そして、子どもの保育と保護者支援の視点の違いとして、保育は養護と教育であり個々の発達過程を見ながら、目標を立て、環境構成を主とした指導をしていく。保護者支援としては、保護者は自分の方針（意向）を持つていく。保育者は指示や助言よりも、保護者の考えを引き出し、実行に移す手助けを心がける。

その後午前、午後のグループ討議の報告を行いました。各グループとも、活発に話し合いがされ『揺らぎ』に對しての解決や克服は、同僚・担当者間で話し合う、他クラスから聞くことにより色々な視点で答えをもらえる。多数の人から色々な保育感を聞くことにより、考え方が幅広くなる。意見というより想いとして先輩に伝える。ベテランの先輩の真似や話を聞く。『保護者対応』での悩みや解決克服

について、コミュニケーションをとっていくことにより、伝えるべき事を伝えていく。同期や頼れる人により聞いてもらうことにより明るく仕事をやる。持ち上がりの先輩やベテランの先輩に相談する等の発表がありました。

最後に小林先生より総評を頂きました。思ったよりベテランや先輩の意見を聞く姿勢ができていくが、聞いた後自分でもっと深めていく努力が必要。保護者対応では、保護者にとつては、我が子だけでなく積極的に挨拶を行い信頼関係を築いていく。園としての意見の統一を行う。外国籍やうつ病の保護者への対応は聴く事が大切。感情の激しい保護者クレームの多い保護者は、信頼関係の気づきが大切であり、その場で答えられぬ事は確認し、後日きちんと答える。（保護者の気持ちのアップダウンで対応が違う）重要なのは、子どもとの関係を深めることにより、信頼関係がとれるということでした。

た。

保育園利用者相談室研修会Ⅱ

平成二十四年十二月二十日、

万国橋会議センターにおいて、

「保育園利用者相談室研修会Ⅱ」が開催されました。

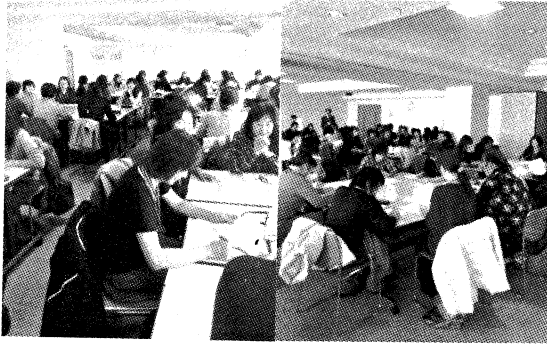
七十四名の参加者が、十のグループに分かれ、運営委員

会で作成した苦情事例八事例の中から、指定議題と自由選

択議題の二題について、問題点、改善点、感想、再

発防止という様々な視点から、グループ内で自由に話し

合い、その成果を順番に発表



しました。

グループ討議の際には、五

名の第三者員の先生方は、グループの傍で、又は中に入っ

て、積極的に討議に参加している姿も見られました。

その後、第三者委員からの感想や講評、助言等に移りました。その中では、個々の事

例内容に深く踏み込んだ具体的な助言も多くあり、共通的

には、保護者や近隣の方との信頼関係の構築やコミュニケ

ーションのとり方、園の方針や考え方の伝え方、子育て支

援の考え方等々、幅広い角度から数多くのアドバイスをい

いただきました。

今回の研修会参加者は、是非、自園の研修会や職員会議

で、ここで学んだ成果を報告し、園全体の保護者や近隣の

方々との対応に役立たせていただきたいと思います。

また、今回の研修会の記録を取りまとめた冊子を、近々

に発行予定ですので、それもご活用ください。

なお、保育園利用者相談室

の会員園には、保護者からの相談等のノウハウを養うた

め、研修会への参加を義務づけております。少なくとも、

年に一回は、職員を派遣してください

くださるようお願いいたします。

保育園専門講座Ⅱ

平成二十四年十一月六日、

横浜ワールドポーターズ イベントホールにて保育園専門講座Ⅱとして「保育所児童保育

要録について」研修会が開催されました。講師に白梅学園

大学・名誉教授の民秋 言先生をお招きし、神奈川県保育

会の会員保育園の他に、横浜市、川崎市、相模原市の会員

外の保育園の園長、保育士百八十名を超える方々の参加と

なりました。

保育所保育指針の改定に伴い在園する子どもの育ちを支

えるための資料として平成二十一年度より「保育所児童保

育要録」が保育所から小学校へ送付されるようになりました。

子どもに関する情報共有に

関して、保育所に入所している子供の就学の際し、市町村

の支援の下に、就学後も子どもの育ちを支えるために、こ

の「保育所児童保育要録」が作成し、小学校へ送付するこ

とが義務付けられました。その「資料」に保育所として

何を記述するのか、改めて今回の講義の中で、「保育所保育

指針」の内容から発達(育ち)を捉える基本的視点としての

発達過程区分、発達(育ち)のポイントとしての心情・意

欲・態度をもとに記入するなど、ひとつひとつ丁寧に実

際の様式(「保育所児童保育要録」)を確認しながら民秋先生

より説明をいただきました。

また、保育所として一人一人の子どもの大切な育ちを支

えるため、子どもの育ち(発達)を確かな視点で捉え、「保

育所児童保育要録」を作成し、小学校へ送付することが大切

小学校の教育に有機的につながっていくことになる。しかし、小学校関係者に、この資料が重要視されていない部分もあり、就学後の子どものために生かされていない目も通されずに保管されているだけという現実があることの話もありました。

もつと保育所として、保育の質を高める努力も必要であることと、保育所の社会的責任として「子どもの発達」をどう支え、保障しているのか、育ちの連続性という視点から小学校との連携の大切さを、改めて考える必要がある。

また、資料作成にあたり、もつと文章能力を意識し、向上させる努力も大切である。

平成二十一年度より「保育所児童保育要録」を送付しているが、各保育所では、今年度で四回目となる送付を控え、色々な迷いや、子どもの育ちを、どのように伝えるべきか、また、小学校との連携についての悩みなどがありますが、この研修会が各保育所の一助となれば幸いです。